
転生トラックで転生したオリキャラで多重クロスに挑戦してみた

地獄鳥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生トラックで転生したオリキャラで多重クロスに挑戦してみた

【Nコード】

N3145W

【作者名】

地獄烏

【あらすじ】

トラックに轢かれて転生するなら、転生先でトラックに轢かれたらその先は……？

これは、あらゆる作品世界に転生する男の物語である。

その日は、なんて事のない一日だった。

朝起きてから飯を食って、自転車を使って登校した。学校に着いてからはいつもの友達とどうでもいい話をした。

定年が近い担任教師の話は相変わらず眠気を誘うものだったし、部活でのシゴキはいつも通りキツイものだった。

その日はなんて事のない一日だった。

ただ、……下校中に俺がトラックに轢かれたことを除けば、の話だが。

原因は自分の信号無視。イヤホンを付けて携帯を見ながら自転車を走らせた俺の自業自得だ。

どうやら俺は死んでしまったらしい。……自分の事である筈なのにどこか実感が湧かない。まるで、いや、まさに他人事といった感じだ。

それは単に現状を理解するために自身の脳が追いついていないからなのか、それとも俺はそこまで淡泊な人間だったのか。

……だが、どちらにしろ考える時間は十分過ぎるほどにあるようだ。

——なにせ俺は今、生まれ変わって赤ん坊になっているのだから。

《転生先：魔法少女リリカルなのは》

俺の名前は須田健太郎^{すだけんたろう}、今年で9歳になる小学生3年生だ。
短くてツンツンの黒髪に黒目、同年代と比べても大柄と呼ん
でいい体型の少年。

見た目の特徴はこの程度、一見普通の子どもに見えるかもしれ
ないが、実は誰にも言えない秘密をもっている。

それは、自分が所謂”前世の記憶”を持っているということと、
この世界が前世で見たことのある”リリカルなのは”というアニメ
作品の世界であるということだ。

最初はこの事態に驚き戸惑ったが、…折角拾った第二の人生。前
世に未練がないわけではないが、楽しまなければ損だと考えて今ま
での日々を送ってきた。

そして俺は今、深夜の海鳴の町を走っている。

どう考えても小学生低学年が出歩くには不適切な時間、見付かれ
ば確実に補導されてしまうだろう。だが、今はそんなことを気にし
ている暇はない。

何故なら、これから『リリカルなのは』という物語（原作）が始

まるのだ。

それは、いつも通りに夕飯を終え、風呂に入り歯を磨き、さて寝ようかとベットに潜り込んだ瞬間に聞こえてきた。

『……聞こえますか？ 僕の声が聞こえますか？』

声が聞こえた。聞こえたというよりも頭の中に直接響いたというほうが近い。聞いたことのないはずなのに、どこかで聞き覚えのある声だった。

（これは……、ユーノ・スクライアの声か！？）

間違いない。リリカルなのはにおいて、主人公の高町なのはが魔法と出会う最初の話だ。

だが、ユーノの念話が聞こえたということは、少なからず自分にも魔法の才能があるということ……？

そこまで思考してから、俺はすぐに動きやすい服装に着替えて家から飛び出したのだ。

「……ハア、…ば、場所はどこだよ。こっちか？」

荒い息を整えもせず、座り込みなくなる気持ちをぐっところえて走り続ける。

もう、頭の中はこれから始まる原作の話のことに夢中で、周りの情報など正確に入ってこない。

……だから、それはきつと俺の不注意だったのだろう。

「……………え？」

その音を聞いて、俺は絶句した。瞼はきつとカッと見開かれていただろう。

ズガンという鈍い音の後、俺を襲ったのは、…痛みすら感じさせない程の衝撃と浮遊感。

かつて一度感じたことのある、…………そして二度と体験したくない感覚。

何もかもがスローモーションで動く視界の中で俺の瞳に写るのは

…………

——かつて俺を轢いた、トラック……………？

そして、俺は、

……………。

…………。

《転生先：魔法先生ネギま！》

俺の名前は北沢秋彦^{きたざわあきひこ}、今年で15歳になる中学3年生だ。

ふわっふわで栗色の髪の毛に同年代と比べて童顔でやや幼くみられがちな少年。

見た目の特徴はこの程度、一見普通の子どもに見えるかもしれないが、実は誰にも言えない秘密をもっている。

それは、自分が所謂”前世と前々世の記憶”を持っているということと、この世界が前々世で見たことのある”ネギま”という漫画作品の世界であるということだ。

最初はこの事態に驚き戸惑ったが、…折角の新しい人生。前世に未練が…ないわけではないが、というかメツチャあるが。楽しまなければ損だと考えて今までの日々を送ってきた。

……いや、だって、あんな展開で死んで終わりになるとは誰も思わないだろ、普通。

まあ、いいや。気を取り直して進めていこう。
だって、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

偶に一緒に猫に餌をやったりする友人——絡繰茶々丸——が襲われているのを助けている最中なのだから。

「ネギ、どうして茶々丸を襲った」

一瞬にして魔法の射手を拳で迎撃し終えた俺は、放心状態で立っているネギに怒りを込めて声をかけた。

「え、……あの、それは……」

「茶々丸は俺の友達だ。そいつを傷つけるってんなら、俺が相手になるぜ？」

突如現れた俺が言った言葉に驚いたのか、ネギたちの顔が驚愕に染まる。

……ククク、驚いてる驚いてる。前は介入する前に死亡したが、今回はそうもいかないさ。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよアンタ！ そこー」

「言い訳は聞きたくないぜ……！ お前等みたいなヤツを見るとイライラして……ん？」

それまで後ろに控えていたアスナが急に前に出てきて叫んだのをスッパリと切り捨てるが、どうも彼等の視線は俺ではなく俺の後ろにある。

……しかも耳を澄ませば聞えて来るのは嫌なエンジン音。
ネギたちの声はすでに悲鳴になり、どこからか「志村！ 後ろ後ろー！」という幻聴まで聞こえてきた。

……ギギギと首を回して後ろを振り向くと、そこには目前に迫ったトラックの姿がッ！！

……………。

……。

《転生先：ゼロの使い魔》

俺の名前はクライヴ、ホールミア伯爵家の長男で、今年で16歳になるトリステイン魔法学院の生徒だ。

サラサラとした美しい金色の髪に、スラリとして体型と整った目鼻立ちの貴族。

見た目の特徴はこの程度、一見普通の貴族の嫡子に見えるかもしれないが、実は誰にも言えない秘密をもっている。

それは、自分が所謂”前世と前々世と前々々世の記憶”を持って

いるということと、この世界が前々々世で見たことのある”ゼロの使い魔”というライトノベルの世界であるということだ。

最初はこの事態に驚き戸惑ったが、…折角の新しい人生。前世に未練が……めっちゃある。というかツツコミどころ満載であるが、楽しまなければ損だと考えて今までの日々を送ってきた。

……いや、しかし、ここはゼロ魔の世界だし、この世界にトラックなんか存在しねえからな。

うん、いい加減に安心ようぜ俺。

まあ、いいや。気を取り直して進めていこう。

だって、今はそんなことを気にしている場合じゃない。

今日は進級のため、春の使い魔召喚の儀式を行わなければならないのだから。

「では、ミスタ・ホールミアは前に」

『召喚の儀』の監督役の教師、ジャン・コルベール先生が次の順番だと俺に伝える。

前に進み、レイピア形の鉄拵えの杖引き抜くと、息を整えて精神を集中する。

「五つの力を司るペンタゴン。我の定めに従いし、使い魔を召喚せ

よ」

呪文を紡ぎ、杖を振る。

一拍の間が空いた後、……目の前には銀色に光る大きな鏡上の物体が浮かんでいた。

これが召喚の門だ。

さて、どんな使い魔がでてくるのかと鏡に近づこうとした時、……嫌な予感が背筋を駆け巡った。

「……ミスタ？ どうしましたか、ミスタ・ホールミア？」

突然に顔色を変え、召喚の門から後ずさりする俺にコルベール先生が疑問を投げかけるが、俺はそれどころではない。

——この感覚はマズい！ 掛け値なしにマズい！！

そう感じた直後、自分の直感を信じて召喚の門に背を向けて一気に駆け出すが無意味だった。

……召喚の門は俺の背後にぴったりと、つかず離れずの距離を保って追いかけてくるのだ。

「ひひひひひひひひッ！！！！」

……俺の必死の努力もむなしく、召喚の門から勢い良く飛び出してきたのは間違いなく、かつて俺を轢き殺したトラックだった。

.....。

《転生先：東方projectの世界》

「美しく残酷にこの大地から往ね！」

そう宣言した八雲紫のスキマから飛び出てきたのは、廃線になった電車……ではなく、もうすでに見慣れてしまったトラックだった。

.....。

.....。

《転生先：ジョジョの奇妙な冒険の世界》

「10トントラックだッ！！ W R Y Y Y Y ！ ブッ潰れよオオッ！」

[illegible]

……目視できないラッシュに上空からトラックの追い討ち、あまりの衝撃に痛みもなく一瞬で死ねたのは運が良かったのかもしれない。

○

•
•
•
•
•
•

《転生先：HUNTER×HUNTERの世界》

G・Iのとある地点。

「フハハハハ！　これがオレ様の具現化系能力によって造られた念トラックだ！」

「……またか」

.....。

.....。

《転生先：TYPE - MOON の世界》

第四次聖杯戦争参加中。

工房に無人のトラックが突っ込んできて（ry

.....。

.....。

《転生先：■■■の世界》

..... オ、オレは何回死ぬんだ！？

次はど.....どこから.....？

い.....いつ“襲って”来るんだッ！？ オレは！
..... オレはッ！

「……うううううう！ うおおおおおお！！
俺のそばに近寄るなああ————ッ！——！」

（後書き）

やはり転生トラックこそが最強。
もしも続きがあるならば、転生先でトラックに殺され続け、いつしか自身を鍛えてトラックに立ち向かうようになり、そして……。みたいな話も書いてみたいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3145w/>

転生トラックで転生したオリキャラで多重クロスに挑戦してみた

2011年10月9日15時47分発行